

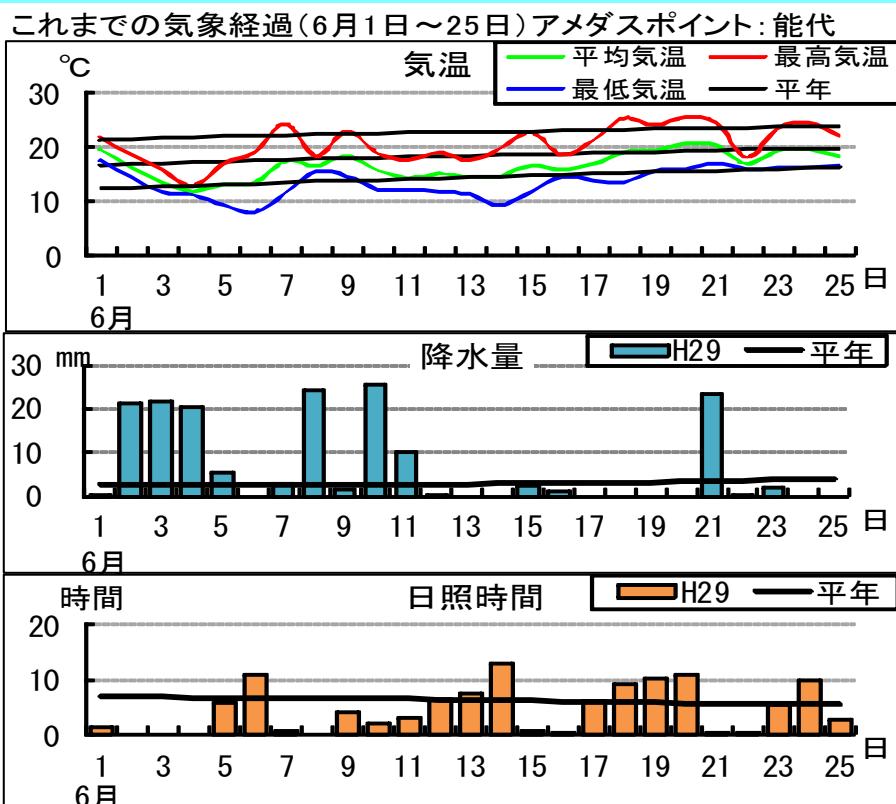
草丈短く、茎数不足 ほ場の生育状況に合わせた管理を！

1 これまでの気象経過

6月に入り、気温は平年より低く推移しました。

降水量は、6月1～2半旬にかけて多くなりました。また、東北北部は平年より7日遅い6月21日頃に梅雨入りしたと見られています。

日照時間は平年より少なくなりました。



2 6月26日現在の生育状況

6月26日現在の管内水稻定点調査ほ（9地点、品種：あきたこまち）の生育は、草丈は短く、茎数は少なく、葉数・葉色は平年並です。

病害虫等は特に目立った発生はありませんでした。

本年は、茎数のほ場間差が大きく、目標茎数が平年の7割程度しかないほ場もあります。周りに合わせず、ほ場ごとの生育状況をよく確認し、今後の管理を行ってください。

○定点調査結果（6月26日）

	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉数(葉)	葉色
本年	31.9	369	8.6	42.9
平年	37.1	394	8.7	43.9
前年	40.3	401	8.7	44.1
平年比較	86%	94%	-0.1	98%
前年比較	79%	92%	-0.1	97%

※平年は過去10カ年の平均値

※葉色はSPAD-502で測定した値

3 今後の水管理

【中干しの判断について】

◆分けつが十分に確保できている場合

○目標穗数（450本/m²程度）と同等の茎数（70株植えで平均茎数21本/株、60株植えで平均茎数25本/株）が確保できたほ場では、中干しを開始してください。

○中干し期間は7～10日程度とし、田面に亀裂が1～2cm入り足跡のつく程度とします。終了後は間断かん水により土壤を酸化的条件に保ち根の伸長を促進します。

◆分けつが十分に確保できていない場合

○目標穗数と同等の茎数が確保できていない場合は、分けつを促進するため、温度の高い日や日照の多い日は浅水で水温と地温を高める管理を行ってください。

○表層剥離や藻類が発生している場合は、地温が上がりにくくなるため、気温の低い早朝や雨の日の水の入れ替えを実施してください。

○土壤が還元しているほ場では、一時落水や中耕機による攪拌などで根の活性化を図ります。

○茎数確保のために中干しの開始を遅らせることになりますが、幼穂形成期（7月15日頃）までには中干しを終える必要があるため、十分注意してください。また、中干しをする場合は、強い中干しは避けてください。

【カドミウム吸収抑制対策について】

○カドミウム汚染米発生が懸念される地域では、出穂前後各3週間（平年で7月15日～8月25日頃）は水田に常に水が張られた状態を保ち、田面に空気を触れさせないようにします。

○ぬかりやすい水田では、中干し時期に溝切りを実施し、秋作業に備えます。

○中干しは土が湿っていて足跡がつく程度とし、強い中干しは避けてください。

3 主要病害虫の防除

— 飼料用米も主食用米と同様に防除対策を行ってください —

【いもち病】

○補植用余り苗は葉いもちの強力な伝染源になります。畦畔等に放置せず、直ちに泥の中に埋めるなどして完全に処分してください。

○管内では、6月25日にいもち病の感染好適に準じる気象条件が観測されています。梅雨入りしていると見られていることから、病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン、ノンプラス等）を散布してください。

! ラブサイド剤等の使用回数に注意！

フサライド剤（薬剤名：ラブサイド、ブラシン等）、トリシクラゾール剤（薬剤名：ビーム、ノンプラス等）の本田での使用回数は3回以内です。農薬を使用した際は必ず帳簿に記載し、総使用回数を超えないよう計画的に使用しましょう。

【斑点米カメムシ類】

○稻が出穂する15～10日前までに数回、畦畔・休耕田・農道・堤防等を対象に地域で一斉に除草を行い、イネ科雑草の除去に努めてください。

○本県の主要加害種であるアカスジカスミカメは、ホタルイ、シズイやノビエの穂に産卵し増殖するため、水田内の雑草対策を確実に行ってください。

○中・後期剤の使用は、発生草種等に応じて適切な剤を選択してください。散布時期や水管理は剤によって異なるので、ラベルをよく読み適正に使用してください。

不明な点がある場合は、山本地域振興局農林部農業振興普及課(TEL52-1241)までご連絡ください。